

## 経済レポート

## 中国を中心に拡大が続く食料貿易

調査部 研究員 野田 麻里子

近年、世界の貿易量の伸び率鈍化、いわゆる「スロー・トレード」が関心を集めている。しかし、食料貿易に注目すると、アジアを中心に拡大傾向がみられる。食料貿易の拡大を主に牽引しているのは、経済成長に伴う所得水準の上昇を背景に食料消費水準が高まっている中国である。

中国で消費水準の上昇と相俟って輸入量が拡大している品目には「ミルク」「乳幼児食」「アルコール飲料」「カフェイン飲料」「野菜」「果物」などがあり、品目によって輸入先はアジア域内にとどまらず、欧州にまで広がっている。

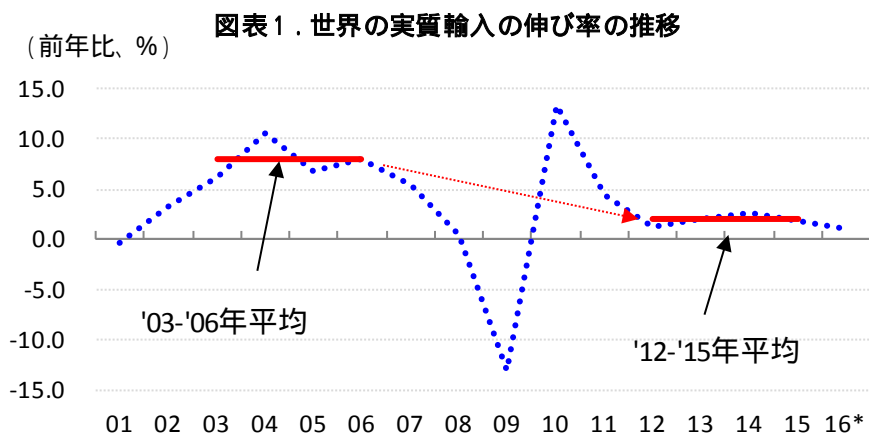
「一帯一路」政策は中国の輸出拡大の方策とみられることが多い。しかし、食料輸入の拡大という現状に鑑みると「一帯一路」政策によって欧州とつながる輸送インフラを整備することは中国の食料輸入の円滑化に資するという側面も持ち合わせているといえそうだ。

また、中国の食料輸入の拡大は「爆食」として否定的な見方をされることも多いが、農村人口の割合が相対的に大きな近隣アジア諸国にとって、中国向け農産物輸出の拡大は、少なくとも当面は、これら諸国の経済成長ひいては社会の安定に資するものと考えられる。

世界の食料貿易の成長をもたらしている中国向けの食料輸出の順調な拡大は、アジア地域、さらには「一帯一路」でつながる欧州諸国にとっても貴重な成長の糧といえるのではないだろうか。

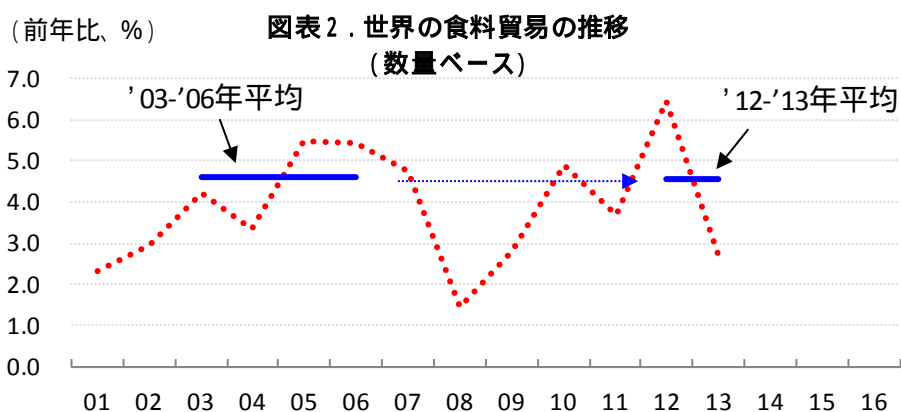
## 1. スロー・トレード？

近年、世界の貿易量の伸び率が鈍化していることに関心が集まっている。2016年10月発表の日本銀行国際局のレポート<sup>1</sup>も「世界貿易量の伸び率は、2003～06年の前年比+8%近傍から2012～15年には同+2%弱に鈍化している」と指摘している（図表1）。



(注) 2016年は1-11月ベース。日本銀行国際局「スロー・トレード：世界貿易量の伸び率鈍化」(2016年)の記述をグラフ化。  
(出所) CPB

しかし、アジア地域では経済成長に伴う所得水準の上昇、いわゆる中間層の拡大などを背景に食料品の貿易が拡大しているというニュースをよく目にする。実際、FAO（国連食糧農業機関）の統計（最新データは2013年）によれば、世界の食料貿易量（輸入+輸出）<sup>2</sup>の伸び率は2003～06年平均も2012～13年平均も前年比+4.6%とスローダウンはみられない（図表2）。

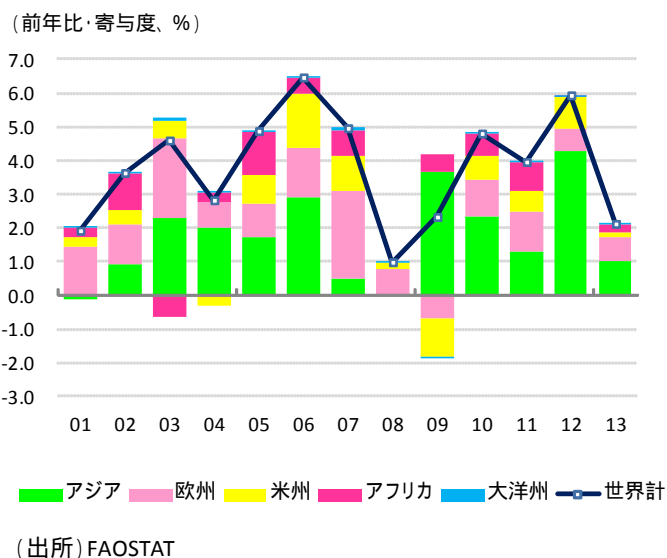
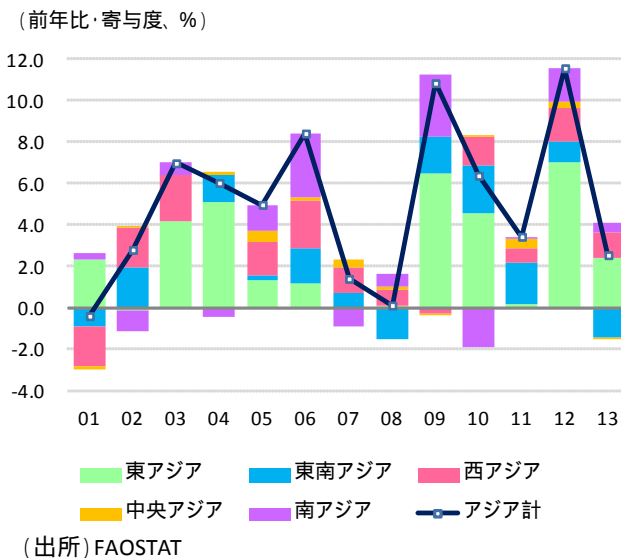
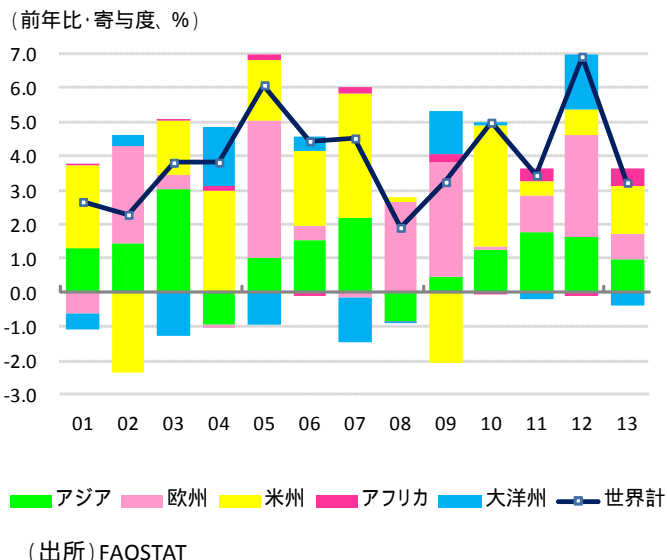
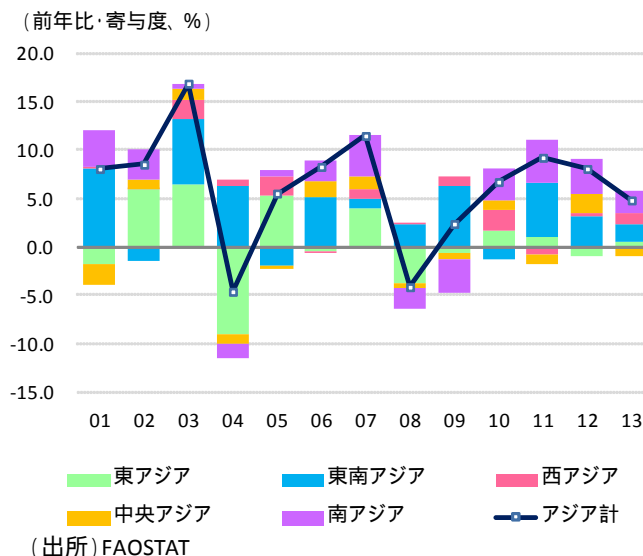


(注) 食料輸入と輸出で統計にやや乖離があるため食料貿易 = 輸入 + 輸出で伸び率を算出。データは2013年まで。  
(出所) FAOSTAT

<sup>1</sup> 日本銀行国際局 高富康介ほか(2016)「スロー・トレード：世界貿易量の伸び率鈍化」。

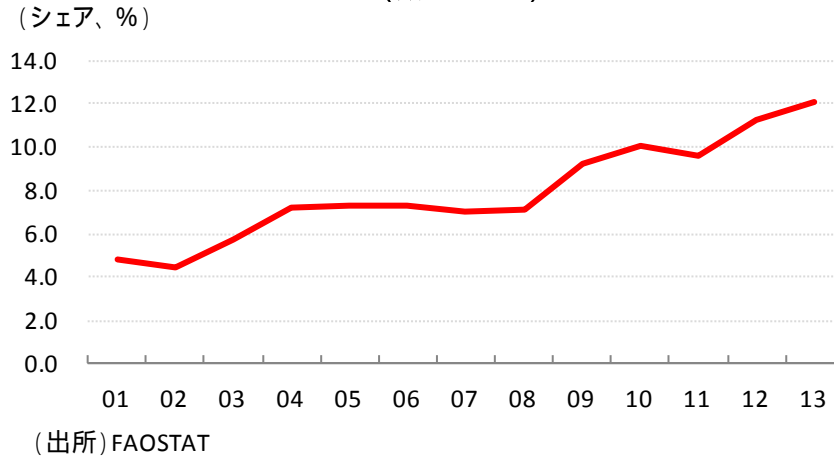
<sup>2</sup> FAOの食料貿易統計における食料の範囲はSITC分類で0(食料品及び動物)、1(飲料及びたばこ)、4(動植物性油脂)、22(採油用の種等)の4品目。

そして近年、こうした食料貿易の拡大に大きく寄与しているのが、新聞報道などにある通り、輸入ではアジア、中でも中国を含む東アジア、輸出についても輸入ほどではないものの、欧州・米州に加えてアジア、そしてアジアの中では東南アジアとインドなど南アジアである（図表3～6）。

**図表3．世界の食料輸入量地域別寄与度の推移**

**図表4．アジアの食料輸入量地域別寄与度の推移**

**図表5．世界の食料輸出量地域別寄与度の推移**

**図表6．アジア食料輸出量地域別寄与度の推移**


金額ベースで見れば、世界貿易に占める食料貿易の割合は輸出で7.8%、輸入で8.2%（WTO、いずれも2014年）とさほど大きくはない。しかし、貿易を通じた経済関係という観点からはその存在は決して小さくないと思われる。また、世界の食料輸入（数量ベース）に占める中国の割合は拡大傾向にあり、2013年には12.1%に達している（次頁図表7）。そこで以下、食料貿易において存在感を増している中国に焦点を当てて現状を分析し、その意味するところについて考えてみた。

図表7. 世界の食料輸入に占める中国のシェアの推移  
(数量ベース)

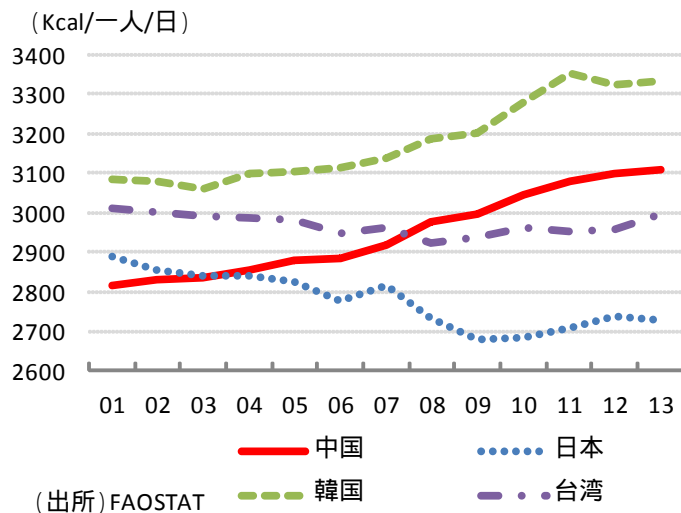


## 2. 質量ともに向上する中国の食料消費水準

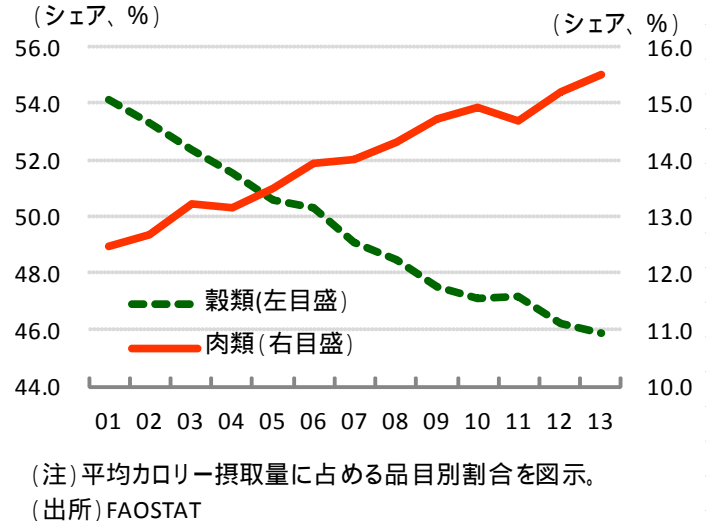
中国の食料消費水準は経済成長に伴う所得水準の向上を背景に着実に上昇している。FAOの統計によれば、中国人の一日当たりの平均カロリー摂取量は2001年の2818kcalから2013年には3110kcalに増加し、東アジアの中では日本、台湾を抜き、韓国に次ぐ水準となっている(図表8)。

またその中身もコメなどの穀類のウェイトが低下する一方で、肉類のウェイトが高まっており、いわゆる「食の高度化」<sup>3</sup>といわれる傾向が認められる(図表9)。

図表8. 中国の平均カロリー摂取量の推移



図表9. 高度化する中国の食料消費



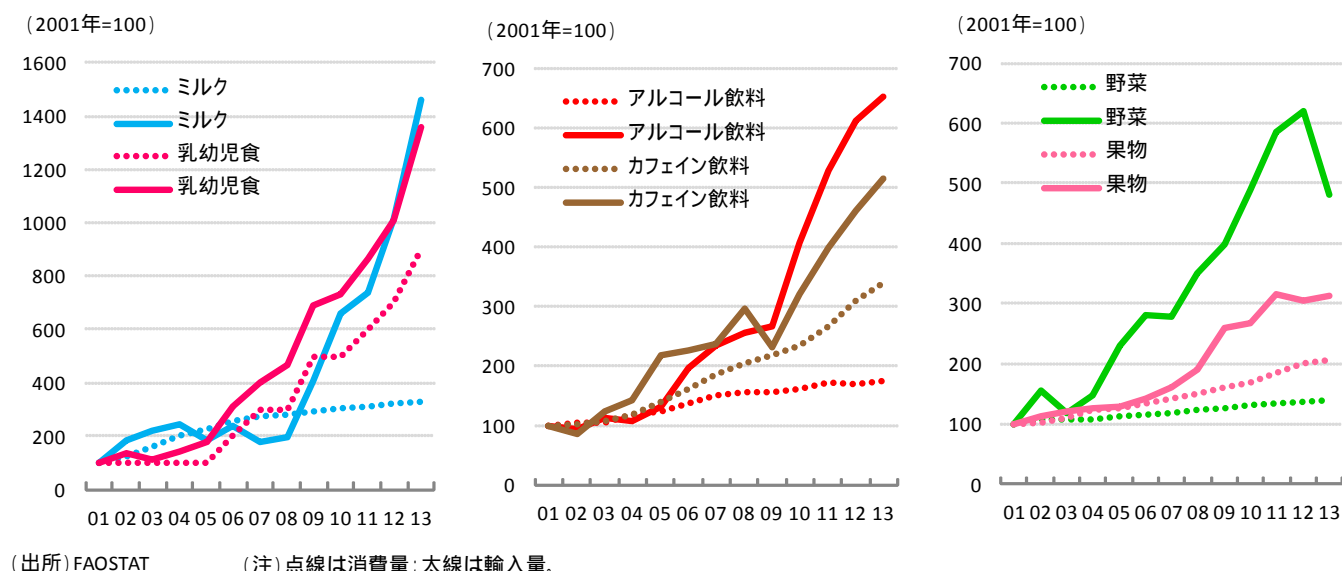
<sup>3</sup> 阮蔚(2014)「中国における食糧安全保障戦略の転換」『農林金融』2月号。

### 3. 中国の「食の高度化」を支える食料輸入

「食の高度化」を背景に中国の食料輸入にどんな変化がみられるのか。食料品の中分類（21品目<sup>4</sup>）のデータを使って、2001年から2013年の13年間に消費水準（kg/一人/年）の上昇幅が大きく、かつ輸入量の拡大幅も大きな品目を抽出してみた。その結果、中分類ベースで「ミルク（除くバター）」、「その他（乳幼児食）」、「アルコール飲料（ワインなど）」、「カフェイン飲料（コーヒー、お茶）」、「野菜」、「果物（かんきつ類、パイナップルなど）」の6品目が抽出された（図表10）。

なお、消費量に占める輸入の割合は品目によってかなりばらつきがある。これらの品目について消費水準（kg/一人/年）データをもとに年間の合計消費量を算出したうえで、これに対する輸入量（1000トン）の割合をみると、「果物」、「アルコール飲料」、「野菜」ではそれぞれ2.7%、1.0%、0.1%に過ぎないが、「ミルク」、「カフェイン飲料」ではそれぞれ18.5%、15.9%を占めている。また「その他（乳幼児食）」については2008年のメラミン混入粉ミルク事件の影響もあり、99.6%と消費のほぼ全量が輸入で賄われているとみられる（いずれも2013年時点）。

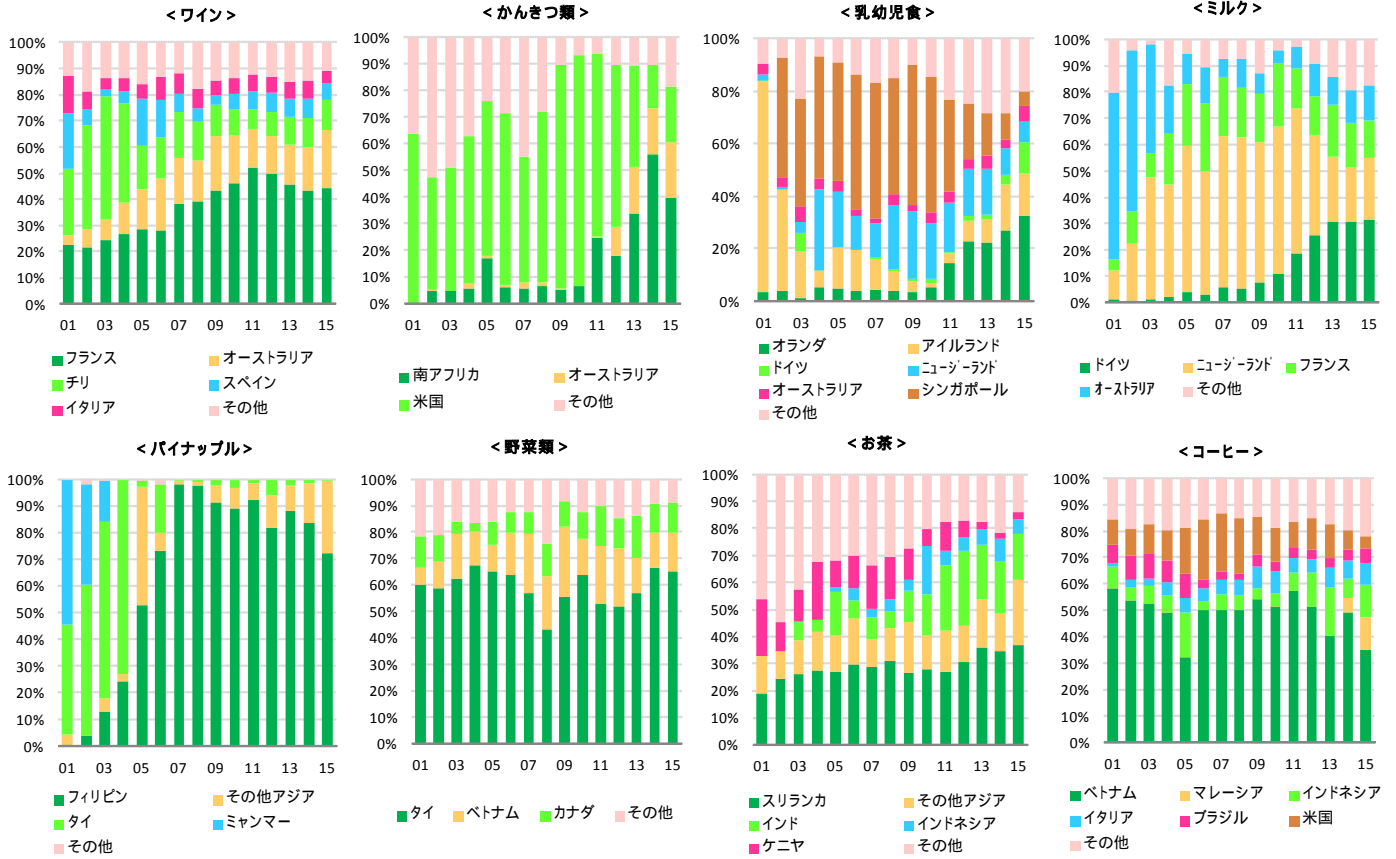
図表10. 中国の品目別食品消費量と輸入量の水準の推移



次に金額ベースの貿易データを使ってこれらの品目の主要輸入先をみると、直近では「アルコール飲料」の輸入で大きなウェイトを占める「ワイン」についてはフランス（総輸入金額に占める割合は44.3%；2015年）、「果物」の中の「かんきつ類」については南アフリカ（同39.5%）、「その他」の「乳幼児食（粉ミルク）」についてはオランダ（同32.2%）、「ミルク」についてはドイツ（同31.4%）とアジア域外からの輸入が大宗を占めている。一方で、「果物」の中の「パイナップル」はフィリピン（同72.2%）、「野菜」はタイ（65.1%）、「カフェイン飲料」の中の「お茶」についてはスリランカ（同36.9%）、「インド」（同17.0%）、「コーヒー」はベトナム（同34.8%）とアジアからの輸入のウェイトが高くなっている（次頁図表11）。

<sup>4</sup> FAOの統計では食品を以下の中分類に分けている：「アルコール飲料」「動物性油脂」「水産物」「穀類」「卵」「魚介類」「果物」「肉類」「ミルク」「その他」「くず肉」「油糧作物」「豆類」「香辛料」「芋類」「カフェイン飲料」「砂糖・甘味料」「砂糖作物」「ナッツ類」「植物性油脂」「野菜」。

図表11. 中国の品目別主要輸入先のシェア(金額ベース)の推移

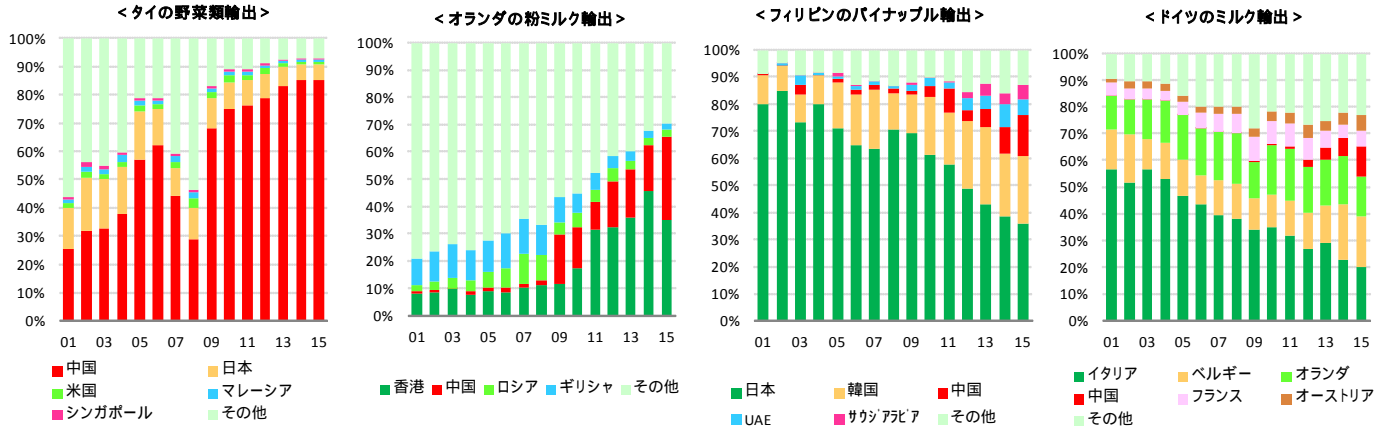


(出所) UNComtrade

ちなみにこれらの主要輸入先について各国の当該商品の輸出に占める中国の割合をみると、フランスのワイン輸出、南アフリカのかんきつ類輸出、スリランカのお茶輸出、ベトナムのコーヒー輸出に占める中国の割合は2015年時点でもそれぞれ6.7%、3.0%、2.6%、1.3%と小さなものとどまっている。これに対して、タイの野菜類輸出、オランダの粉ミルク輸出、フィリピンのパイナップル輸出、ドイツのミルク輸出に占める中国の割合は2015年時点でそれぞれ85.4%、30.6%、15.4%、11.4%と相対的に大きく、かつ拡大傾向にある(図表12)。

以上から中国の食料品の輸入の拡大はアジア域内にとどまらず欧州にまで広がっていること、また品目によって相互の依存関係には濃淡があることが分かった。

図表12. 中国の主要輸入品の輸入先国の輸出に占める中国のシェアの推移



(出所) UNComtrade

#### 4. 「一帯一路」は中国にとって重要な食料輸入ルート

習近平主席が推進する「一帯一路」政策はともすれば中国から周辺国への輸出拡大のルート整備と見られがちである。しかし、食料貿易に注目すると、「一帯一路」政策に基づいて欧州につながる輸送インフラを整備することは中国の食料輸入の円滑化に資するという側面も持ち合わせているといえそうだ。また中国の食料輸入の拡大は「爆食」として否定的な見方をされることも多いが、農村人口の割合が相対的に大きな近隣アジア諸国にとって、中国向け農産品輸出の拡大は、少なくとも当面はこれら諸国の経済成長、ひいては社会の安定に資するものと考えられる。世界の食料貿易の成長をもたらしている中国向けの食料輸出の順調な拡大は、アジア地域、さらには「一帯一路」でつながる欧州諸国にとっても貴重な成長の糧といえるのではないだろうか。

#### - ご利用に際して -

- 本資料は、信頼できるとされる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。
- また、本資料は、執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一的な見解を示すものではありません。
- 本資料に基づくお客様の決定、行為、及びその結果について、当社は一切の責任を負いません。ご利用にあたっては、お客様ご自身でご判断くださいますようお願い申し上げます。
- 本資料は、著作物であり、著作権法に基づき保護されています。著作権法の定めに従い、引用する際は、必ず出所:三菱UFJリサーチ&コンサルティングと明記してください。
- 本資料の全文または一部を転載・複製する際は著作権者の許諾が必要ですので、当社までご連絡ください。